

# レイチェル・カーソンと農業

essay

市立名寄短期大学

助教授 河合 知子

一九九六年四月、富山で開催された『レイチェル・カーソンのつどい』に生活科学科の学生と共に参加した。一年生のゼミのテーマに『レイチェル・カーソンと『沈黙の春』を取り上げて三年めになる。昨年度、レイチェル・カーソン日本協会が読書感想文コンクールを実施していることを知り、これに応募したところ幸運にも入選した学生がいて、その授賞式に出たのである。

入選した学生は、稚内市で酪農業を営む家に生れ、小さい時から牛の世話を手伝ってきた。短大生になつた今も、休みの時期には帰省して、牛舎の仕事や食事のしたくをするという真面目な学生である。入選作品となつた『北海道酪農のあり方と『沈黙の春』』と題する感想文の要旨は以下の通りである。

彼女が『沈黙の春』を読み、レイチェル・カーソンの生き方を学んでいくうちに思ったことは、消費者であると同時に生産者でもあることの悩みであった。ポストハーベスト農業に汚染されているか

も知れない配合飼料を牛に与え、その牛乳を出荷していることを父親から聞き、どうすればこういう状態を改善できるのか考えるのである。配合飼料を変えれば良いと思うけれど、そう簡単にいかないことも知っている。農業の被害を受ける消費者としての意識をもちながら『沈黙の春』を読むものの、農業を使わなければ生活できない生産者の立場もわかっている。安心して飲めるおいしい牛乳を生産するにはもっと大きな組織が動かなければと彼女は指摘する。

環境問題や消費者問題の視点からレイチェル・カーソンの作品は読まれることが多いが、生産者としての立場からレイチェル・カーソンの作品をどう読んだかという読書感想文は少なく、そこが審査委員の目に止まったのであろう。これだけ情報があふれている社会なのに、農業に直接携わり農村地域に暮らす人々からの情報は著しく少ないのが現状である。

授賞式のと、中村梧郎氏のスライドをまじえた講演があった。中村氏は、ベトナムで生まれた癒

合二重体児のベトとドクを撮り続けており、枯葉剤からごみ問題まで環境汚染をテーマにしている報道写真家である。

『田は枯葉剤を浴びた』（新潮文庫）、『戦場の枯葉剤』（岩波書店）などの著書の中で使われている写真をスライドにして紹介してくれた。ベトナム戦争で使用された枯葉剤の影響をまともに受けたベトナムの人々の様子、アメリカや韓国のベトナム帰還兵に現われた枯葉剤被害の現状、さらに彼らの子どもたちにさえ影響を与えていること、日本のダイオキシン汚染は諸外国と比較して増加傾向にあることなど、目を覆いたくなるような生々しい写真に、ユーモアのある話を添えて私たちに環境問題の深刻さを伝えてくれた。中村氏は後半、ドイツで成功しつつあるリサイクル運動やダイオキシン処理についても紹介し、楽観的とは言えないにしても悲観的にならない話でしめくくった。

レイチェル・カーソンのつどいが終わり、先の学生は頬を紅潮させて「来て良かったです」と言っ

# 沈黙の春

レイチェル・カーソン  
青樹榮一 訳



新潮文庫

『沈黙の春』(新潮文庫)

昭和49年2月20日発行

平成7年6月5日44刷

全358ページ単価560円

〔目次構成〕

- まえがき
- 1 明日のための寓話
- 2 負担は耐えねばならぬ
- 3 死の霊薬
- 4 地表の水、地底の海
- 5 土壌の世界
- 6 みどりの地表
- 7 何のための大破壊？
- 8 そして、鳥は鳴かず
- 9 死の川
- 10 空からの一斉攻撃
- 11 ボルジア家の夢をこえて
- 12 人間の代価
- 13 狭き窓より
- 14 四人にひとり
- 15 自然は逆襲する
- 16 迫り来る雪崩
- 17 べつのだ

注1)

『レイチェル・カーソン』

(1907~1964)

海洋学者であり作家でもある。

1962年、雑誌「ニューヨーカー」に連載した『沈黙の春』は、DDTなどの化学薬品の脅威と自然保護を訴えた。アメリカ全土に反響を与えたのみならず、世界中の環境政策に大きな影響を及ぼした。作品は他に『海辺』『センス・オブ・ワンダー』など。

注2)

『レイチェル・カーソン日本協会』

1987年に「レイチェル・カーソン女史生誕80年記念日本集会」が開催され、この集会をきっかけに1年後レイチェル・カーソン日本協会が設立された。会の目的は、レイチェル・カーソンの哲学を学び伝えると共に自然と環境を保護する意義の普及、研究及び活動の交流を図ることである。

注3)

中村 梧郎(なかむら ごろう)

1940年長野県生まれ。

報道写真家。

た。授賞を知らせた時、そんなところに行くのはいやだと消極的だった面影はない。壇上で受賞者が賞状を受けとった後に発言を求められた時、「レイチェル・カーソンの本がきっかけで、酪農業について改めて考えることができたことを感謝している」とはきはきと答えた姿も「親バカ」かも知れないが、たのもしかった。事実、初対面の方々から母親と間違えられたが。

富山はちよつど桜が満開の時期花見をし、ほたるいかの酢の物やわっぱ飯に舌鼓を打った。気候や風土が違えば、生産されるものの時期や種類が違うのは当然である。そしてその土地に暮らす人々はその周辺で生産されるものを用いて

料理をし、食生活を営んできた。海や川や土などが汚染され環境破壊が進行すると、花見どころか、私たちが口に入れる食へ物も危うくなる。食料を外国に依存する傾向が強まれば強まるほど、その危険性は高くなるであろう。私たちが消費者が自分たちの健康を守り、自然環境を大切にしていこうという視点をもつと同時に、生産者が置かれている現状にも視野を広げ、日本の農業を守る運動へと発展させることにつなげなければと痛切に感じた。

五月下旬、日本最北の地でやつと桜の花が開く。今年は二度、花見ができて得をした気分になった。しかし春になつても桜の花が咲かない、ほたるいかもいなくなつた、『沈黙の春』が本当に来てしまった、ということにならないように、若い世代と共にレイチェル・カーソンの生き方を学ぼうと思う。

河合 知子(かわけ ともこ)さん

岡山県生まれ。

京都府立大学生生活科学部卒業後、北海道生活改良普及員となる。

一九八五年に市立名寄女子短期大学勤務現在、同短期大学助教。